

第8期 中間事業報告書

平成17年4月1日から平成17年9月30日まで

 株式会社トランスジェニック

(証券コード 2342)



Trans Genic Inc.

経営理念

CONTENTS

株主の皆様へ	P2
事業の概況	P3
セグメント情報	P4
神戸研究所における 取り組み	P5
株主アンケートの 集計結果ご報告	P6
財務諸表	P7・P8
株式の状況	P9
会社の概況	P10
株主メモ	裏表紙

生物個体からゲノムにいたる

生命資源の開発を通じて

基盤研究および医学・医療の場に

遺伝情報を提供し

その未来に資するとともに

世界の人々の健康と豊かな

暮らしの実現に貢献する

株主の皆様へ



代表取締役社長

是石 匠 宏

株主の皆様には日頃より格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。第8期中間期（平成17年4月1日から平成17年9月30日まで）の事業の概況をご報告申し上げます。

当中間期は、平成13年12月からスタートした遺伝子破壊マウスを作製し、優先的に情報提供するプロジェクトにおいて、アステラス製薬株式会社及び住友化学株式会社に対する配列情報の開示が完了いたしました。今後は、2社より要望のあった系統について、表現型解析情報の提供、継続的使用権の許諾、そして将来のマイルストーンフィーやランニングロイヤリティを獲得するための前提となる、共同による特許出願につなげてまいります。製薬企業や基盤研究を行う大学、研究機関等に対して非独占的に情報を提供する枠組みにおいても、成約を増やすことができました。また、表現型解析や遺伝子破壊マウスの作製などを製薬企業等から受託する案件についても、製薬企業や大学等のネットワークを強化し、顧客ニーズを汲み取り、これに対応できる体制を築いてまいりました。

当中間期の業績は、配列情報の開示が完了し、同売上高が前年同期よりも減少したことなどから、売上高が前年同期比87%の248百万円となりました。損益につきましては、遺伝子破壊マウス作製に係る研究開発費が減少したことや、研究開発に係る経費の見直しを進めコスト削減に努めた結果、経常損失が449百万円（前年同期は724百万円の損失）、中間純損失は482百万円（同727百万円の損失）となり、損失額を大幅に減少することができました。

今後については、遺伝子破壊マウスの情報を提供する新たな契約の締結にあたり、配列情報開示段階での採算性を考慮した事業モデルでの締結に取り組んでまいります。また、これまで培った製薬企業や代理店等とのネットワークをさらに強化し、ユーザーのニーズをより汲み取ることができる体制にすることで、受託事業等の拡大に努めてまいります。さらには、創業方向を志向した高付加価値戦略、蓄積してきた生命資源や経営資源を活用した新たな事業展開の検討に取り組んでまいります。抗体事業におきましてはGANPプロジェクトや尿サンプルによる癌診断に利用される体外診断薬の開発を製薬企業及び診断薬メーカーと進めており、黒字化に向けた着実な歩みを進めてまいります。

株主の皆様におかれましては、こうした当社の姿勢に何卒ご理解を賜り、一層のご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

平成17年12月

事業の概況

当中間期は、売上高が248百万円（前年同期比87%）となりました。事業部門別の内訳は、遺伝子破壊マウス事業の売上高が216百万円（同83%）、抗体事業が32百万円（同134%）であります。減収の要因として、遺伝子破壊マウス事業における配列情報の開示が完了し、同売上高が前年同期で大幅に減少したことが挙げられます。

一方、損益については、遺伝子破壊マウス作製に係る研究開発費が減少したほか、研究開発費や経費等の見直しを進め、コスト削減に取り組んだ結果、営業損失は443百万円（前年同期は724百万円の損失）、経常損失が449百万円（同724百万円の損失）、中間純損失が482百万円（同727百万円の損失）となり、損失額を大きく減少することができました。

Topics

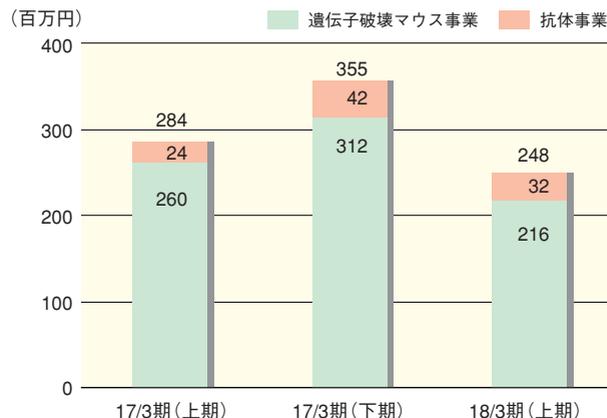
Vital Star社（中国・北京）と共同研究契約締結

平成17年5月、遺伝子破壊マウス事業における生産の効率化、高付加価値化を図ること等を目的として、Vital Star社（中国・北京）と共同研究契約を締結しました。当社が保有する技術を同社へ移管し、遺伝子トラップクローンやマウス作製に関する共同事業化について検討するとともに、創薬ターゲットの探索に関わる研究全般についても、同社との提携を模索することにしております。

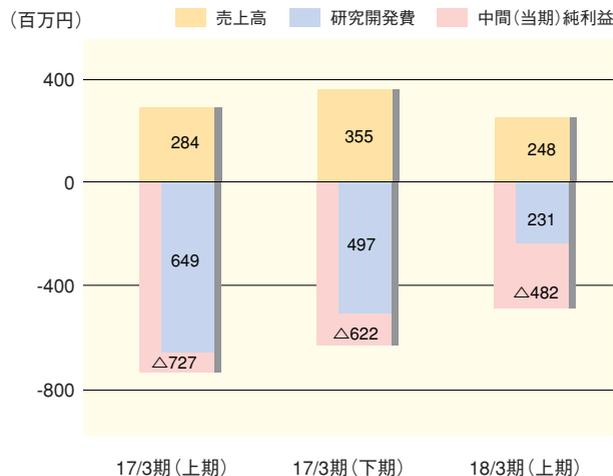
株式会社ユージーンを吸収合併

平成17年7月、当社の子会社であった株式会社ユージーンを吸収合併いたしました。可変型遺伝子トラップ法に係る技術・ノウハウを導入する当初の目的を達成し、合併直前までは当社の技術開発的な側面を担っておりましたが、遺伝子破壊マウス事業の中核施設を神戸研究所に集約することを機に、同社を合併することにいたしました。

売上高の推移



損益の状況



セグメント情報

■ 遺伝子破壊マウス事業

遺伝子破壊マウス事業においては、アステラス製薬株式会社及び住友化学株式会社の2社に対し、遺伝子破壊マウスから得られる情報を優先的に提供する契約のうち、遺伝子配列情報の提供が完了しました。今後は詳細なデータを必要とする系統について、表現型解析情報の提供、継続的使用権の許諾を有償で行ってまいります。また、現在のところ2系統が共同による特許出願に進んでおりますが、将来のマイルストーンフィーやランニングロイヤリティの前提となる、共同による特許出願により多くのものが移行できるよう取り組んでまいります。非独占的に情報を提供する枠組みにおいては、本年9月に株式会社三菱化学生命科学研究所と特定遺伝子破壊マウスの使用権許諾に関する契約を締結したほか、大学等への特定遺伝子破壊マウスの使用権許諾も受注が増加しました。

しかしながら、上記2社との契約による配列情報の開示が完了したことにより、同売上高は前年同期で減少したことから、遺伝子情報売上高は、前年同期比64%の138百万円となりました。表現型解析や遺伝子破壊マウスの作製などを製薬企業及び大学等から受託する収入については、顧客からのニーズに対応し、積極的に受注を獲得することができたことなどにより、受託事業収入は前年同期比178%の77百万円となりました。



〈遺伝子破壊マウス〉

■ 抗体事業

抗体事業においては、糖尿病に対する関心が高まるなか、AGE製品の売上が増加したほか、新たに取り組んでいる尿サンプルによる癌診断薬開発に係る売上が増加したことなどにより、製品売上高は前年同期比127%の23百万円となりました。受託事業収入は、GANPマウスを用いた高親和性抗体の作製受託等が増加したことから、前年同期比159%の8百万円となりました。

抗体事業における高付加価値ビジネスとして期待しているGANPプロジェクトにおいては、高親和性抗体の作製受託を行うほか、抗体医薬や診断薬を開発する製薬企

業、診断薬メーカー等にGANPマウスを提供し、有用性の検討を実施いただいております。



〈尿中ジアセチルスベルミン測定用 ELISAキット〉

神戸研究所における取り組み



神戸研究所（神戸市）



■平成17年7月に神戸研究所が稼働を開始

当社の遺伝子破壊マウス事業、抗体事業の新たな拠点として建設しておりました、当社にとって初の自社施設である「神戸研究所」が平成17年7月より稼働を開始しました。

神戸研究所が建設された神戸ポートアイランド第2期地区は、神戸医療産業都市構想の下にあり、医療関連企業や研究機関の集積が進んでおります。これら企業との人的・技術的交流が、今後の当社の事業展開に寄与するものと考えております。その一例として、平成17年10月には同地区内に研究所を有する株式会社プロトセラと同社技術を用いた創薬ターゲット探索に関する共同研究契約及び業務委託契約を締結しました。また、国立大学法人熊本大学との共同研究もこれまで通り実施してまいります。

■神戸研究所における取り組み

当社の研究開発及び生産は、神戸研究所（神戸市）、宇土研究所（熊本県宇土市）、油日研究所（滋賀県甲賀市）の3拠点で行ってまいります（上図参照）。神戸研究所は、営業部門、研究開発部門が同一建物内にあるため、製薬企業のニーズを研究開発部門によりフィードバックできることを期待しております。

神戸研究所では次のような研究開発に取り組んでまいります。

- 自社における創薬ターゲット候補の探索
- 事業シナジーのある企業との共同研究及び業務提携
- 疾患モデルマウスの作製に関する研究開発
- 競争力のある抗体技術の導入及び開発

神戸研究所の稼働を機に、研究開発により一層力を入れ、黒字化に向けた取り組みを推進してまいります。

株主アンケートの集計結果ご報告

第7期事業報告書において株主アンケートをお願いいたしましたところ、多数のご回答とメッセージをいただきました。厚くお礼を申し上げますとともに、アンケートの結果とご意見の一部を掲載させていただきます。

集計結果では、ご回答いただいた株主の皆様は60代が最も多く、次に70代、50代となっております。50代から70代までの方を合わせると、全体の約80%となりました。

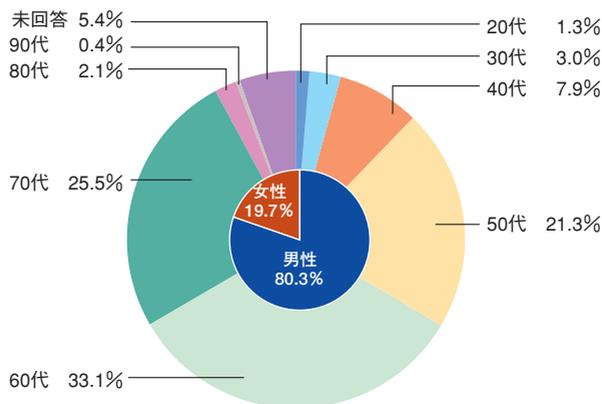
当社株式の購入動機では「将来性」を挙げられた方が全体の約35%と最も多くの意見をいただきました。また、「人の将来のために医学的な見地から貢献する会社だから」というご意見など、当社への期待・応援の声を多く頂戴しました。これらに応えるべく、全社一丸となって頑張っております。

事業報告書の内容につきましては「ビジネスモデルの図解や、財務諸表のコメントが分かりやすかった」「将来が見えた」などのご意見をいただきました。また「黒字化の時期をコメントして欲しい」「神戸研究所について紹介してほしい」「会社説明会・施設見学会を開催してほしい」などのご意見も頂戴しました。

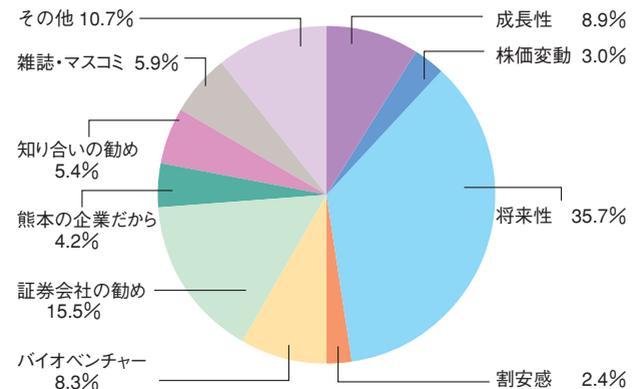
今回の中間事業報告書で「神戸研究所における取り組み」を掲載しました。また、平成17年5月に開催しました会社説明会の動画配信をホームページで行っております。
(<http://www.transgenic.co.jp/jp/ir/data/index.html>)

お寄せいただいたご意見・ご要望を今後のIR活動に活かし、より一層分かりやすい誌面づくりを心掛け、正確かつ詳細な情報提供を通して、引き続き皆様からのご支援をいただけるよう努めてまいります。

■ 回答者年齢・性別



■ 株式購入動機



財務諸表

■ 中間貸借対照表

(単位：千円)

科 目	前 期 平成17年3月31日現在	当中間期 平成17年9月30日現在
(資産の部)		
流 動 資 産	3,056,042	2,071,785
① 現金及び預金	2,356,378	1,474,289
受取手形及び売掛金	183,310	55,406
有 価 証 券	349,828	349,915
棚 卸 資 産	77,277	102,672
そ の 他	89,450	89,557
貸倒引当金	△ 202	△ 55
固 定 資 産	564,850	960,879
有形固定資産	299,538	630,362
① 建 物	64,355	399,677
工具器具及び備品	173,452	150,834
そ の 他	61,729	79,850
無形固定資産	52,441	43,999
投資その他の資産	212,871	286,517
投資有価証券	133,000	225,750
そ の 他	79,871	60,767
資 産 合 計	3,620,893	3,032,664

POINT

1

● 現金及び預金の減少

平成17年7月に完成した神戸研究所の建設資金の支払い及び研究開発に係る未払金、費用の支払いがあったことなどにより現金及び預金が減少しました。

● 建物の増加

神戸研究所の完成に伴い、その工事代金368百万円を建物として計上しました。

科 目	前 期 平成17年3月31日現在	当中間期 平成17年9月30日現在
(負債の部)		
流 動 負 債	699,178	945,026
短期借入金	382,000	404,000
未 払 金	216,898	78,276
前 受 金	54,968	26,665
1年内償還予定社債	—	200,000
1年内償還予定新株予約権付社債	—	200,000
そ の 他	45,312	36,083
固 定 負 債	1,228,000	180,401
社 債	200,000	—
② 新株予約権付社債	850,000	—
長期借入金	178,000	156,000
そ の 他	—	24,401
負 債 合 計	1,927,178	1,125,427
(資本の部)		
② 資 本 金	3,014,765	3,346,885
② 資本剰余金	3,098,297	3,426,094
利益剰余金	△ 4,418,707	△ 4,900,766
その他有価証券評価差額金	—	35,998
自 己 株 式	△ 640	△ 975
資 本 合 計	1,693,714	1,907,236
負債・資本合計	3,620,893	3,032,664

POINT

2

● 社債の減少、資本金、資本剰余金の増加

平成16年9月に発行した転換社債型新株予約権付社債が当中間期に650百万円株式に転換されたことにより、資本金、資本剰余金がそれぞれ増加するとともに、社債が減少しました。なお、平成17年10月には同社債の株式への転換が全額完了しました。

■ 中間損益計算書

(単位：千円)

科 目	前中間期	当中間期
	平成16年4月1日から 平成16年9月30日まで	平成17年4月1日から 平成17年9月30日まで
売 上 高	284,980	248,974
売 上 原 価	98,223	140,876
売 上 総 利 益	186,757	108,098
③ 販売費及び一般管理費	910,871	551,381
営 業 損 失	724,114	443,283
営 業 外 収 益	19,121	1,377
営 業 外 費 用	19,857	7,755
経 常 損 失	724,851	449,661
③ 特 別 損 失	—	29,913
税引前中間純損失	724,851	479,574
法人税、住民税及び事業税	2,383	2,484
中 間 純 損 失	727,235	482,058
前 期 繰 越 損 失	3,068,977	4,418,707
中 間 未 処 理 損 失	3,796,212	4,900,766

POINT

3

●販売費及び一般管理費の減少

研究開発費の大部分を占める遺伝子破壊マウス作製費用は、配列情報開示の完了により減少しました。これにより、研究開発費は231百万円（前年同期は649百万円）となり、販売費及び一般管理費も減少しました。

●特別損失の増加

本社研究所に係る有形固定資産の一部を除却し、29百万円を固定資産除却損として計上しました。

■ 中間キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

科 目	当中間期
	平成17年4月1日から 平成17年9月30日まで
④ 営業活動によるキャッシュ・フロー	△457,412
④ 投資活動によるキャッシュ・フロー	△434,301
財務活動によるキャッシュ・フロー	9,524
現金及び現金同等物の増減額	△882,190
現金及び現金同等物の期首残高	1,925,993
現金及び現金同等物の中間期末残高	1,043,803

※前中間会計期間は中間連結キャッシュ・フロー計算書を作成しており、当中間会計期間より中間キャッシュ・フロー計算書を作成しているため、前年同期との比較は行っておりません。

POINT

4

●営業活動によるキャッシュ・フロー

配列情報開示の完了による入金と遺伝子破壊マウス作製に係る研究開発費の支出等があった結果、457百万円の資金を使用しました。

●投資活動によるキャッシュ・フロー

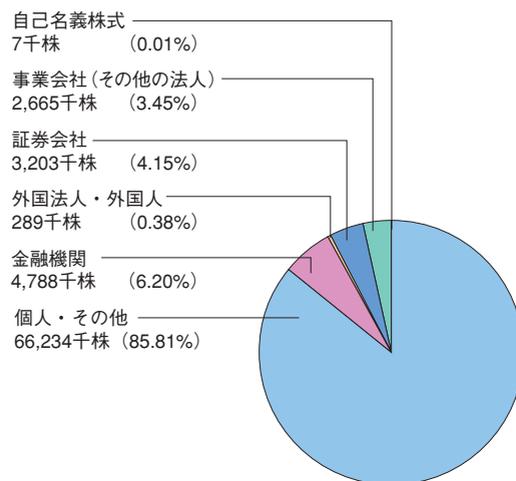
本年7月に稼働した神戸研究所の建設資金等を支払った結果、434百万円の資金を使用しました。

株式の状況 (平成17年9月30日現在)

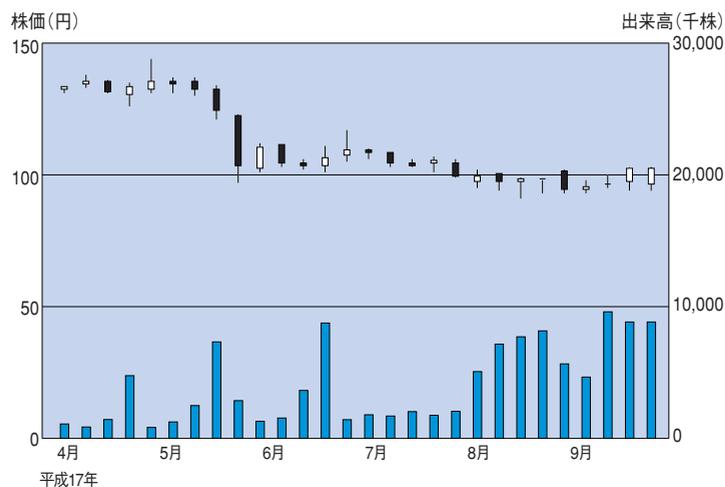
- 会社が発行する株式の総数 281,347,000株
- 発行済株式の総数 77,186,802株
- 株主数 12,656名
- 大株主の状況

株主名	持株数(千株)	議決権比率(%)
井出剛	3,331	4.32
大阪証券金融(株)(業務口)	2,061	2.67
松井証券(株)(一般信用口)	1,562	2.02
日本生命保険(相)	1,350	1.75
第一生命保険(相)	1,050	1.36
電源開発(株)	900	1.17
是石匡宏	622	0.81
(株)和陽インターナショナルコンサルティング	600	0.78
西村俊一	490	0.63
マネックスビーナス証券(株)	396	0.51

所有者別株式分布状況



株価及び出来高の推移



株主メモ

- 決算期 3月31日
- 定時株主総会 6月
- 株式確定基準日 3月31日
- 定時株主総会
議決権行使株主
確定日 3月31日
- 中間配当基準日 9月30日
- 利益配当基準日 3月31日
- 1単元の株式数 1,000株
- 名義書換代理人 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号
三菱UFJ信託銀行株式会社
同事務取扱場所 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号
三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
同 取 次 所 三菱UFJ信託銀行株式会社 全国各支店
野村證券株式会社 全国本支店
- 公告掲載新聞名 日本経済新聞

決算公告については当社ウェブサイトにて貸借対照表
及び損益計算書を記載しております。

<http://www.transgenic.co.jp>

郵便はがき

810-8790

料金受取人払

福岡中央局
承認

13257

差出有効期間
平成18年6月
30日まで
(切手不要)

(受取人)

福岡市中央区天神1-1-1
アクロス福岡東館9階

株式会社トランスジェニック
経営企画室 IR担当者 行



フリガナ			
ご氏名			
ご住所	〒() (都・道・府・県)		
お電話番号	()		
性別	男・女	年齢	()歳
株式 投資歴	a. 3年未満 c. 10年以上20年未満	b. 3年以上10年未満 d. 20年以上	